

〔 野菜 〕

1. 概況

年明けから5月までは気温の低い状況が続いた。一転して6・7月はかなり高い時期があり、秋も高めの気温で推移した。沖縄では11月から長期曇天が続き、また、九州でも12月にはいと急激に寒くなるとともに日照時間も例年に比べかなり少なくなった。そのため、平成23年の野菜作に大きな影響を与えた。また、沖縄では5月の台風2号以降、相次ぐ台風の襲来により、パイプハウスや露地野菜が被害を受けた。野菜ごとの概況を以下に記す。

2. 果菜類

1) イチゴ

品種動向：促成栽培において、福岡は「あまおう」、佐賀・大分・宮崎は「さがほのか」、熊本は「さがほのか」、「紅ほっぺ」および「ひのしずく」、鹿児島は「さがほのか」と「さつまおとめ」、長崎は「さちのか」が、それぞれの主要品種である。熊本で「紅ほっぺ」の作付けが増加傾向である。宮崎における四季成り品種は「みやぎなつはるか」。各県ともに新品種に対する期待は大きく、育種を急いでいる。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島）：（平成22年度産）1・2月の低温で収穫遅れも認められたが、その後回復し、収量・品質ともに平年並みからやや上回った。（平成23年度産）育苗期の高温のため、やや炭疽病発生が多かった。また、暖秋のため、頂果房の生育が早く、収穫が7～10日程度早まるとともに、果実が小型化し、奇形果の発生も認められた。炭疽病以外に、萎黄病、うどんこ病ならびにハダニが発生し、生産に影響を与えた。佐賀ではCO₂施用を実施。

四季成り／普通栽培（宮崎）：栽培技術の向上により、平均 2t/10a を達成した。ハダニ被害が認められた。

2) トマト

品種動向：産地により、品種は多様。また、葉かび病抵抗性品種の導入が増加している。「りんか407」、「麗容」、「感激73」、「マイロック」、「CF桃太郎はるか」等の桃太郎系、が促成・抑制栽培用の主要品種。沖縄では「りんか409」。夏秋栽培用としては、「桃太郎サニー」、「みそら」、「りんか407」等。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄）：定植後、台風の被害もなく、ほぼ順調に推移し、特に佐賀では収量が伸びた。一方、福岡では12月中旬から1月の低温・寡日照のため、着色遅れ、草勢低下がみられ、12月の出荷は減となった。また、宮崎では小玉傾向であった。

普通栽培（熊本、大分、宮崎）：大分では生育時期の寡日照および梅雨明け後の高温により出荷量はやや減少したものの、熊本・宮崎ではほぼ順調であった。大分では、裂果軽減のためのUVカットフィルム、また、宮崎では高温抑制のため遮熱性フィルムの導入・利用が進められている。

抑制栽培（熊本、宮崎、鹿児島）：熊本では11月上旬の高夜温により、11月中旬の出荷が倍増し、その後もほぼ順調であった。一方、宮崎では、低温により着色が遅れ気味で、そのぶん大玉果が多かった。また、鹿児島では低温・寡日照により、着果不良が認められた。

病虫害では、黄化葉巻病の被害が大きく、すすかび病、灰色かび病、コナジラミ、ハモグリバエも問題とされた。黄化葉巻病（コナジラミ）対策として、0.4mm目合いの防虫ネット、さらにUVカットフィルムの導入がなされている。熊本では、コナジラミ類が媒介するトマト黄化病 ToCV (*Tomato chlorosis virus*) が新たに発生した。

3) ナス

品種動向：福岡における促成栽培用の主要品種は「筑陽」（台木「トナシム」、「台太郎」、「トレロ」等）である。佐賀、長崎、熊本、鹿児島においても「筑陽」が主要品種であり、長崎、熊本、鹿児島では、「黒陽」、「ヒゴムラサキ」、単為結果性「あのみり」も、それぞれ栽培されている。沖縄では「長者」が主要品種である。夏秋栽培用の品種として、佐賀では「黒錦2号」、熊本では「筑陽」と「ヒゴムラサキ」。

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、沖縄）：地域により、作況にばらつきが見られた。福岡は12

月中旬以降の寡日照と気温の変化で生産量低下したものの3月以降は回復。佐賀、鹿児島、沖縄では収量がやや低下した。一方、熊本ではほぼ順調な作柄であった。すすかび病、アザミウマ、コナジラミの被害が認められた。熊本、鹿児島ではスワルスキーカブリダニの導入が進められている。

普通栽培(佐賀、熊本)・抑制栽培(熊本):ほぼ順調に推移した。

4)ピーマン

品種動向:促成栽培用の主要品種は、熊本では「ニューエース」、「京ゆたか7」、「あきの」、宮崎では「京鈴」、鹿児島では「TM京波」、「京鈴」、沖縄では「ちぐさ」、「オールマイティ」である。佐賀の普通栽培では「さらら」、大分の雨除けでは「さらら」、露地では「みおぎG」が、それぞれ栽培されている。宮崎では、宮崎県育成の複合病害抵抗性台木の利用が増えてきた。

促成栽培(熊本、宮崎、鹿児島、沖縄):熊本、宮崎では作柄順調であったが、鹿児島では天候不順と低温の影響で年内および2月の収量が少なかった。また、沖縄は11月の長雨過湿による軟腐病等の発生、12月の寡日照による着果不良により、収量は少なかった。促成栽培では、うどんこ病、斑点病、アザミウマが発生した。鹿児島で青枯病発生圃場が微増。燃油高騰対策として、ヒートポンプの対策が大隅半島で拡大している。

普通栽培(佐賀、熊本、大分)・抑制栽培(熊本、宮崎):熊本は普通・抑制栽培ともにほぼ順調。大分の普通栽培では定植時期の渇水の影響で出荷量が減った。佐賀では、栽培面積が減少傾向。宮崎の抑制栽培も順調であるが、昼間にも暖房機が作動する状況であるため、燃料費が増大。大分ではタバコガ対策として、防虫ネットの導入を進めている。

5)キュウリ

品種動向:促成栽培用として、「ハイグリーン」、「極光607」、「久輝」、「グリーンラックス」、「エクセレント353」、ステータス系、アルファ系など、県、産地により多様な品種が栽培されている。褐斑病抵抗性品種の導入が進んできた。普通栽培では「南極1号」(鹿児島)や「一心」・「ちなつ」(佐賀)が、抑制栽培では「久輝」(宮崎)、「一心」・「エクセレント」(佐賀)、「翠星節成2号」・「フレスコ100」(鹿児島)がそれぞれ利用されている。

促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄):熊本、宮崎、鹿児島では作柄順調で、宮崎や鹿児島では平年より増収した。一方、九州北部では、8~9月の育苗期の高温、12月中旬以降の急な冷え込み、寡日照により草勢低下し、収量が落ちた。沖縄も寡日照で収量が低下した。この作型では、べと病、褐斑病、うどんこ病、黄化えそ病、退緑黄化病、アザミウマ、ネコブセンチュウが発生した。紫外線カットフィルム、0.4mm目合いの防虫ネット、天敵(スワルスキーカブリダニ)の導入が進んだ。

普通栽培(熊本、鹿児島、沖縄):熊本、鹿児島ではほぼ順調で、鹿児島では病虫害の発生も少なかった。沖縄では、黄化えそ病が多発した。

抑制栽培(福岡、佐賀、熊本、宮崎、鹿児島):日照不足により、福岡、宮崎、鹿児島ともに尻細り果や曲がり果が多発した。熊本では退緑黄化病、黄化えそ病も多発した。

6)スイカ

品種動向:促成・半促成用の大玉主要品種は、「春のだんらん」、「祭りばやし777」、小玉は「マダーボール」、「ラビット」。熊本では、小玉スイカの作付け面積が増加。

促成栽培(熊本、沖縄)・半促成栽培(長崎):熊本は低温によりやや小玉化。沖縄ではミナミキイロアザミウマが媒介するスイカ灰白色斑紋病が激発し、生産量減少した。長崎では、開花期の高温により着果がやや不安定であった。また、うどんこ病、ハダニ、アブラムシの被害が認められた。

普通栽培(鹿児島、沖縄)・抑制栽培(熊本):鹿児島の普通栽培では、6・7月の多雨、低温のため玉肥大がやや遅く、収量は減少した。沖縄の普通栽培、熊本の抑制栽培は順調であった。

7)メロン

品種動向:「アンデス」、「クインシー」、「肥後グリーン」、「アールス雅」系、「アールスセイヌ」系、「ベネチア」系、「ユウカ」等の多様な品種が、産地・作型毎に展開している。品種の変動は小。

促成・半促成栽培(熊本、宮崎、鹿児島):概ね平年並みから平年以上であったが、鹿児島の半促成栽培

において、収穫期の低温により収穫ピークが平年より10日程度遅れ、5月中旬にずれ込んだ。

抑制栽培(長崎、熊本、宮崎、鹿児島):育苗期の高温、11月上旬の高夜温、生育後半の低温・寡日照により生育遅延、着果不良、また、草勢低下による品質も低下も認められた。退緑黄化病、つる割病、黒点根腐病、またコナジラミ、アザミウマの被害が多発した。熊本では、病虫害対策として、抵抗性台木の利用、0.4mm目合いの防虫ネットの導入が進められている。

8)カボチャ

品種動向:主要品種は、「えびす」、「味平」、「くりゆたか」、「くりほまれ」、「宮崎早生1号」で、鹿児島では「くりゆたか」から「くりほまれ」へ一部移行。

促成・半促成栽培(佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄):熊本ではほぼ順調。長崎では3月の寒気・強風により生育遅延がみられた。宮崎では栽培前期の果実が大果であったため、春先以降の成り疲れが認められた。鹿児島、沖縄では日照不足、台風12号被害等により、小玉傾向であった。

普通栽培(鹿児島、沖縄)・抑制栽培(熊本、宮崎):沖縄での普通栽培、熊本での抑制栽培は、それぞれ概ね順調であった。宮崎の抑制栽培では、日照不足による草勢低下が認められた。

CMV等のウイルス病、うどんこ病、白斑病、疫病、アザミウマ、アブラムシによる被害が認められた。

9)ニガウリ

品種動向:「えらぶ」(佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島)、「チャンピオン」(佐賀、鹿児島)、「宮崎つやみどり」(宮崎)、「か交5号」(鹿児島)、「汐風」・「群星」(沖縄)が栽培されている。品種の変動は小さい。

促成・半促成栽培(長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄):熊本、宮崎の作柄は平年並みであった。長崎、鹿児島、沖縄では、定植遅れ、低温・寡日照により、生育は遅延傾向で、果実数・肥大ともに不十分で、収量は低下した。

普通栽培(宮崎、鹿児島、沖縄):鹿児島では例年並みの収量が得られた。一方、宮崎では寡日照による流れ果や肥大不良がみられ、沖縄では二度の台風災害(2号、9号)で収量が減少した。

抑制栽培(熊本、宮崎、鹿児島):熊本では順調であったが、宮崎、鹿児島では寡日照による流れ果や肥大不良がみられ収量低下した。

うどんこ病、アザミウマ、アブラムシ、センチュウ被害が認められる。熊本ではつる割病が拡大しており、新土佐台木を導入している。

10)サヤインゲン(長崎、熊本、鹿児島、沖縄)

品種動向:主要な品種は、「ベストクroppキセラ」、「ビックリジャンボ」、「サーベル」、「ステイヤー」、「ケンタッキー」。

概ね作柄は順調であったが、沖縄の促成栽培では11月の高温、12月以降の寡日照による着莢不良で、不作となった。また、鹿児島の抑制栽培ではアザミウマが多発した。その他病虫害として、菌核病、マメハモグリバエ、ハダニ、ヨトウガ等が認められた。鹿児島のハウス栽培では、スワルスキーカブリダニが導入されている。

11)ソラマメ

品種動向:主要品種は、「陵西一寸」、「さくら一寸」、「唐比の春」、「ハウス陵西」。鹿児島の夏まき栽培で「唐比の春」が、また、秋まき栽培で「さくら一寸」の栽培が増加している。

夏まき栽培(熊本、鹿児島):熊本では作柄順調であった。鹿児島では、年内の高温で収穫時期が前進化した。しかし1月以降は、低温と霜害で収穫量は減少した。また、アザミウマ対策のためのIPM防除体系の確立を急いでいる。

秋まき栽培(長崎、鹿児島):播種後の生育は順調であったが、冬季の低温・降霜で生育遅延傾向がみられた。

12)エンドウ

品種動向:主要品種は、夏まき年内どり栽培用の「美笹」、「ミナミグリーン」、「サツマグリーン」、夏まきハウス栽培用の「サラダスナップ」、「ニムラサラダスナップ」、また、秋まき栽培用の「ニムラ白花」、「ニムラ赤花2号」、「さつま白花」、「あくねグリーン」、「ニムラサラダスナップ」等。

夏まき栽培(長崎、鹿児島):播種後の高温による生育不良に加え、冬期の低温による生育遅延(長崎)、あるいはアザミウマ発生による被害(鹿児島)により、減収した。

秋まき栽培(熊本、鹿児島):熊本ではほぼ順調な作柄であった。鹿児島の冬春どりにおいては、暖秋で収穫が前進したが、1月以降の収穫量は低温と霜害のために減少した。ガク枯れも多かった。春どりにおいても、1月以降の低温と霜害で生育遅延が認められた。防霜および降灰対策として、小型ハウスの利用を検討している。

13) オクラ(熊本、鹿児島、沖縄)

品種動向:主要品種は、「ブルースカイ」、「ニュースカイ」、「フィンガーファイブ」、「ガリバー」。熊本の早熟・普通栽培では作柄順調であった。鹿児島の半促成・早熟・普通栽培では、4~5月の低温で収量が少なかったが、収穫期間延長により、総収量は10%程度増加した。鹿児島ではオオタバコガの被害が認められるため、フェロモントラップを導入している。沖縄の普通(春植え)栽培では、台風2・9号による災害で収量は減少した。

3. 葉根菜類

1) アスパラガス

品種動向:主要品種は、「ウエルカム」で、大分では「スーパーウエルカム」も。品種の動きはない。

半促成栽培(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分):春の低温の影響で春芽の萌芽が遅く(福岡、長崎)、また、昨夏の猛暑による貯蔵養分不足で細芽が多く、収量はやや減少した(福岡)。熊本ではほぼ順調であった。夏芽は、気象条件に恵まれたため、前年より収量増加した。佐賀では、夏季の高温対策として、寒冷紗被覆を推進。斑点性病害(斑点病・褐斑病)、アザミウマ、ヨトウムシの被害が認められた。

2) ネギ

(1) 小ネギ(福岡、佐賀、熊本、大分、鹿児島)

品種動向:「鴨頭」、「冬彦」、「冬作」、「若香ゴールド」、「博多黒」、「黒泉夏用」、「ストレートネギ」他を、季節に応じて使い分けて周年栽培している。大分では梅雨時の耐倒伏性品種が導入され、鹿児島では「鴨頭」、「夏彦」が増加傾向。

梅雨時期に軟弱・倒伏等で出荷量減少し(福岡)、夏季は葉先枯れが発生し品質低下した(福岡、大分)。12月以降は低温による生育の遅れが生じた(福岡)。熊本ではほぼ順調な作柄であった。

ネギハモグリバエ、アザミウマ、また根腐萎凋病の発生が認められた。虫害抑制のため、UVカットフィルムや防虫ネットを導入。

(2) ネギ(熊本、大分、鹿児島)

品種動向:主要品種は、「龍翔」、「ホワイトスター」、「金長」、「長悦」、「元蔵」、「吉蔵」他を、産地・作型に応じて使い分け。大分ではF₁品種を主体とした構成に変化している。鹿児島の夏まき・初秋まき栽培では「羽緑」、秋まき栽培では「春扇」が、それぞれ増加傾向にある。

大分の春まき栽培では、5月・8月の下旬の曇天寡日照により3週間ほどの生育遅延がみられたが、収量は平年並みであった。秋まき栽培では、年末の低温により生育停滞しており、減収が予想されている。熊本の作柄は順調であった。ネギハモグリバエ、ネダニ、軟腐病、黒斑病が認められた。

3) タマネギ

品種動向:「貴錦」、「レクスター1号」、「スパート」、「浜育」、「改良秀玉」、「ターザン」、「もみじ3号」他が産地・作型に合わせて栽培されている。鹿児島の早出しでは「浜笑」が増加傾向。

秋まき(早出し)栽培(佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島):熊本、宮崎ではほぼ順調であったが、長崎では冬季の乾燥によりやや生育遅延がみられ、また大分では収穫時期の梅雨降雨による収穫遅れのため、品質低下・収穫不能となり、収量が減少した。

秋まき(普通)栽培(佐賀、熊本、大分):熊本はほぼ順調であったが、大分では春先の乾燥で球の肥大不足となり、収量が減少した。

病虫害として、べと病、アザミウマ、ハモグリバエの発生が認められた。なお、佐賀では集落営農によるタ

マネギ機械化の取組みや加工用契約取引出荷が進められている。つり玉の省力化のため、米倉庫を利用した除湿乾燥・冷蔵貯蔵が増加。

4) レタス(佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島、沖縄)

品種動向:「サウザー」、「ステディ」、「アストラル」、「オリンピア」、「シスコ」系、「レガシー」、「グリーンストーン」他、多数の品種が栽培され、かつ、品種の動きも速い。鹿児島の秋まき栽培では「V」が増加傾向。

夏まき・秋まき栽培(佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島、沖縄):長崎における年内どりは作柄良好であったが、年明けは低温・寡日照で生育遅延が認められた。沖縄では疫病のため収量減となった。その他、菌核病、軟腐病、ヨトウガ等夜蛾の被害が認められた。

冬まき・春まき栽培(大分、沖縄):沖縄での冬まき栽培は概ね順調であった。

5) ハクサイ(長崎、熊本、大分、鹿児島)

品種動向:夏まき・秋まき栽培では、「ひろ丸」、「黄ごころ85」、「大福」系、「CR黄健」系、「黄久娘」他、鹿児島の冬まき栽培では「鮮黄」、「菊錦」等が栽培される。鹿児島の秋まき栽培において、「黄楽 80」が増加傾向。熊本では萎黄病抵抗性品種が利用される。品種変動はやや早い。

作柄はそれぞれほぼ順調であった。べと病、白斑病による被害が長崎で認められた。

6) キャベツ(佐賀、熊本、大分、鹿児島、沖縄)

品種動向:夏まき栽培では「T-532」、「夢舞台」、「アーリーボール」、「秋徳」、「金系 201 号」、「耐寒大御所」、秋まき・冬まき栽培では「金系 201 号」、「金春」、「秋蒔き中早生」、「はやどり」、「おきな」、熊本の高原春まき栽培では「秋徳」、「溪流」等が栽培される。鹿児島の晩夏まき、初秋まきで、「夢ごろも」、「輝岬」が、それぞれ増加傾向。

各県、各作型ともに、作柄はほぼ順調であった。沖縄の秋まき栽培において12月以降の寡日照のためにやや小玉傾向となったが、作柄には影響しなかった。コナガ、夜蛾類が発生した。

7) ブロッコリー(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島)

品種動向:夏まき栽培用品種として、「ピクセル」が広く利用され、他に「グランドーム」、「彩鱗」、「しき緑96号」、「キャッスル」、「エンデバー」、「沢ゆたか」等が、また、鹿児島の秋まきでは、「直緑93号」、「ピクセル」他が栽培される。鹿児島の夏まき、秋まきで、「幸よし」、「あまぎ」が、それぞれ増加傾向。

夏まき栽培において年内の高温により前倒し出荷となったものの、各県、各作型ともに、作柄は概ね順調であった。福岡の夏まき冬だし栽培においては、12月下旬からの低温により生育が抑制されるとともに、アントシアンの発生が多く、品質にも影響が見られ、さらに1月は低温と乾燥により遅れが発生した。ブロッコリーの病虫害として、黒腐病、コナガの発生が認められた。福岡で根こぶ病が拡大。

8) コマツナ(鹿児島)

春夏まき栽培用として、「菜々美」、「わかみ」、「黒わかな」、秋冬まき栽培用として「わかみ」、「SC8-007」が栽培される。平年並みの収量であった。ヨトウガ、コナガの発生が認められるため、フェロモントラップ、防虫ネットが利用される。

9) ダイコン(長崎、熊本、大分、鹿児島)

品種動向:夏まき・秋まき・冬まき栽培用品種として、「夏天下」、「猷夏37号」、「福誉」、「役者大門」、「役者奉行」、「耐病総太り」、「YRくらま」、「春風太」、「喜太一」他、春まき栽培用として、「天寶」、「喜太一」、「YR鉄人」、「猷夏」等が栽培される。加工用の秋まき栽培では、「耐病干し理想」、「干し理想」。鹿児島の晩秋まき、秋冬まき、冬まきおよび春まき栽培で、「春慶」、「春神楽」、「つや風」が増加傾向。品種の動きはやや速い。

各県、各作型ともに、概ね順調な経過であった。熊本の(高原)春まき栽培で芯腐れ(黒芯)、長崎の夏秋まき栽培で収穫後期の降雨・高温による品質低下、鹿児島夏の夏まき・秋まき栽培で多雨による軟腐病、秋冬まき栽培で、1~2月の低温による生育遅延がみられた。

10) ニンジン

品種動向:すべての地域・作型での主要品種は「向陽2号」。他に、夏まき栽培用として「黒田五寸」、「陽州五寸」、秋まき栽培用として「楽陽」、「ベーター312」、沖縄では「TE-30」、冬まき栽培用として「黒田五寸」

が利用される。品種の変動は小さいが、鹿児島においては「愛紅」、「敬紅」等が増加傾向。

夏まき栽培(熊本、大分、沖縄):生育良好で、ほぼ順調。

秋まき栽培(熊本、鹿児島、沖縄)・冬まき栽培(長崎):概ね順調であったが、長崎の冬まき栽培では、収穫終盤の降雨・高温による腐敗のため、品質がやや低下した。

11)ゴボウ(福岡)

品種は「渡辺早生」。秋まき 1~3 月どり栽培では、寒波による葉の枯れ込みが早まり、また、積雪で一時的に出荷量は減少したが、作柄は平年並みであった。晩秋まき 4~5 月どりでも寒波による生育遅延、収穫物のサイズダウンがあり、3 割減収した。春まき 11~12 月どり栽培では 9 月上旬の小雨乾燥により岐根発生が認められたものの、作柄は平年並みとなった。残渣をすき込んだ圃場で、黒あざ症が多発した。

12)バレイショ

品種は、「ニシユタカ」、「メークイン」、「デジマ」、「農林1号」で、動きはほとんどない。

春作(長崎、熊本、鹿児島):長崎では軟弱徒長し、やや小玉傾向、鹿児島では一部の産地で寒害の影響を受けた。熊本では順調であった。疫病、軟腐病の被害が認められた。

秋作(長崎、熊本、鹿児島、沖縄):沖縄ではそうか病により収量が減少した。他の地域の作柄は良好。

13)サツマイモ(大分)

高糖度系の品種に変化している。品種は、「ベニハルカ」、「高系 14 号」、「土佐紅」。定植時の干ばつ、台風等による大雨、日照不足により収量は減少した。

(九州沖縄農業研究センター暖地野菜花き研究調整監 坂田好輝)